

潮流

潮流◆題字奥野誠亮

特定非営利活動法人子ども未来研究所理事長

柴崎嘉寿隆氏に聞く①

自然の中で五感をフルに使う

——早くから野外体験学習に取り組みられました。

野外体験学習は大自然の中で、「自分が主人公」ということを体験する小・中学生向けのものです。前回(4月17日付1429号)もお話ししましたように「自分で決めて、自分で行動し、自分で欲しい結果を創りだしていく」ことをコンセプトにしています。仲間とともに「選択と責任」や「自立」を体験していくのですが、同時に、身体全体を

個性や自分らしさを表出する場を

野外体験学習では自立をテーマに自然の中で五感をフルに使っている。

アートセラピーの考え方やアートを使った体験活動の場を広げたい、という。

使って、そこそ五感をフルに使った活動ができる機会でもあります。グロースセミナーでは毎年、北海道の士幌高原で4泊5日の生活を行います。普段は使われない感性が磨かれますし、仲間との共同生活の中で友情や思いやりの気持ちが育っています。

——ルールを自分たちで決めているようですね。
「多数決とじゃんけんは禁止」としていますが、それ以外は、グループ分けやどんな活動をするかなど、すべて子どもたちで話し合っていて決めています。例えば、「山に登

ろう」という計画一つにしても、クマに出会ったり岩場があったりと危険な事態も想定されますので、「行きたくない」という子どもも出てきます。すると、「行きたい」と考えている子どもたちが「こうすれば安全だ」などと説得していきます。全員が納得するまでも時間がかかりますが、私たち大人は「行かない」ことも含めて子どもたちの総意で決めるまで、口出ししないで見守ることにしています。そして総意で決めたことに対しては全力でサポートするようにしています。

——子どもの体力によっては、ハードな活動もありそうですね。

小学校の低学年の子どもにとっては、例えば山からマウンテンバイクで30キロメートルほど下っていく体験では、最後の方ではブレーキだけでは追いつかずに足をつっぱってスピードを調節したりすることもあります。時には転倒することもあります。大きなけがをしないように私たちがサポートするようにしています。

なお、グロースセミナーの場合、8月の4泊5日の活動のほか、7月に事前のセツトアップセミナー、9月にフォローアップのセミナーも実施しています。子どもたちは自然の中の活動だけでなく、「宿題」として、「毎日自分で決めたことを実行する」



特定非営利活動法人子ども未来研究所理事長

柴崎嘉寿隆

しばさき・かずたか◎(株)クエスト総合研究所代表取締役。JIPATTディレクター。立教大学卒。1989年大宮青年会議所の小学生を対象とした体験学習の企画・運営に参加、翌年から独自の事業としてグロースセミナーを開始。1999年に特定非営利活動法人子ども未来研究所を設立。著書に「自分セラピー／自分を好きになれる本」など。

ことにしています。例えば「毎日、ランニングをする」とか「毎日、おはようございますと挨拶する」など、日々の生活でも自立していくことをセミナーの一貫した目的としています。

自然と向き合うこと自体が五感を使った芸術的な関わりそのものですが、最終日にはアートに関わった活動も行っており、子どもたちには自然とクリエイティビティが育まれています。

与えられた情報で満足しない

——選択と責任や自立は子どもにとって

「個性」や「自分らしさ」を育む機会になりそうです。

考えてみますと、現代社会は他人から与えられる「情報」が溢れた社会です。ある意味、向こうから勝手にやってくるのが「情報」で、自分から工夫するという余地がありません。しかし、大自然の中では、こちらから積極的に働きかけられない限り、レスポンスはありません。与えられた情報に満足するのではなく、目の前の自然に自ら関わることで、そこに創意・工夫が生まれてきますし、多様な「学び」も生まれます。北海道の大自然の中の活動は、子ども

たちにとっては「非日常」の世界です。そこには学校の規則もなく、自分たちが決めたルールと計画で生活することで、自立心が育ちます。アートの活動においても、そこでは自分が表現したいことが重要で、表現の仕方なども人から教わるよりは、自分なりのやり方を模索していくことが大切です。そうであって初めて、その子どもの「個性」や「自分らしさ」が十分に発揮されるのではないのでしょうか。

——学校現場では、発達障害など、個別に対応が必要な子どもの問題が指摘されています。

私たちの活動でも、最近は障害のある子どもさんの参加も増えてきました。そこで、専門的にはクリニカル・アートセラピーと呼ばれる分野のカリキュラムについても勉強して、少しずつ導入をしているところです。これは「治療」や「自己回復」を目的としたもので、この分野で進んでいるカナダのカリキュラムを参考にしています。

ただ、そのような子どもたちのみを区別して対応するというのではなく、すべての子どもたちが安心して参加できる環境づくりの一環として、そのような専門的な対応もできるようにしたいと考えています。

——アートという自分を表現する活動は、発達障害などの有無にかかわらず、その子

どもにとって自分を認めてもらえる機会になりそうです。

ある地方でのことですが、小学校4年生のとても元気のよい子どもさんがいましたが、5年生の時に担任が変わったことがきっかけになって、学校から「問題児」と思われていました。ところが6年生になって再び担任が変わったら、学級委員にもなるほど、成長しました。その子どもはたまにアートにとっても興味を持っていたので、その活動を通して、自分と向き合う時間になって、友達とのコミュニケーションもうまく取れるようになったことが、「変化」のきっかけになったようです。

型でなく表出を大切に

——学校の教育活動では、知識とともに学び方を学ぶことが課題になっています。先日、テレビ番組で、ある中学校のダンス部にアメリカのヒップホップの有名なコーチが1週間指導にやってきた話を見ました。日本の中学生たちははじめにダンスの練習をしているのですが、そのコーチは「みんな同じ動きをしており、個性がない。そもそも楽しんでいない」と指摘します。ところが1週間後には、生徒たちはとても楽しそうにダンスで個性を表現するようになりました。

アートもそうですが、自分を表出することがねらいの活動では、「こういう時は、こうしましょう」と一定の型を教えてしまうと、それが制限となって十分に自己を表出できなくなることがあります。同じダンスでも日本の盆踊りなどは個性というより「和」を尊ぶ慣習に沿ったものですから、そのねらいとするとを十分に踏まえた指導が求められるということでしょう。

——型よりも表出を大事にする点は、アートセラピーと共通する面があります。

そうですね。アートセラピーについては、大きく描画（ドローイング）、ダンスムーブメント、ドラマセラピー、音楽の四つの分野があります。「アート（芸術）」というとか高尚で難しいと思う人もいますが、「鼻歌を歌う」「いたずら描きをする」など、ちょっとしたことを通して自分の心の中と向き合う機会を持つ、あるいは自分を整えていくためにそのような機会を持つことが大切なのです。

——アートセラピーというと特別な場のように思いますが、今後、期待したいことは何ですか。

先ほど説明しましたが、自分の心の内面としっかり向き合う機会、五感を十分に使って自分を表出する機会は、意外に少ないのです。

欧米ではアートセラピーもあたり前のように広がっていますが、日本では、アートセラピーに対する理解や実践の場がまだまだ立ち遅れています。ですから、例えば学童保育などの場で、1週間に1回程度でもよいので、アートセラピーにつながる活動の場があるといいなと思います。

——先生方へのメッセージを。

私たちは、NPOとしては子どもたちのためのアートセラピーの教室などを全国で開いています。アートセラピーの考え方を学ぶセミナーなどは、(株)クレスト総合研究所で実施しています。幼稚園や保育園、小学校の先生方も参加されており、自分たちの日ごろの教育活動などに活かしている方などいますので、アートセラピーや心理療法そのものに関心はなくても、子どもたちとアートの関わりや自己表出の効果などに関心のある方にも学んでもらえる場などを提供しています。

また、教育機関や行政、子育て支援グループなどからの依頼を受けて、アートワークセラピストや講師の派遣、保護者や先生方を対象としたアートワークや研修、講演会なども実施していますので、お問い合わせをいただければと思います。

特定非営利活動法人子ども未来研究所

<http://www.cof.or.jp/>